

全視情協 / ないーぶつうしん	2003/9/5
NAIIV 通信	No. 30
発行 発行責任者 岩井 和彦	
特定非営利活動法人	
全国視覚障害者情報提供施設協会(全視情協)	
事務局 〒550-0002 大阪市西区江戸堀1-13-2 日本ライトハウス盲人情報文化センター内 Tel.06-6441-5990 Fax.06-6441-0095 E-mail:naiiv@kurumi.sakura.ne.jp	

————— 主 な 内 容 —————

● ごあいさつ(理事長 岩井和彦)	2
● 臨時総会報告	3
● 臨時総会決議	4
● 大任の中で学んだこと(前理事長・川越利信)	5
● 平成15年度事業について	6
● 各種研修会も順次開催	7
● 講演会(厚生労働省社会参加推進室 田村 一氏)	8
● 福岡点字図書館、創立50周年おめでとうございます	9
● 次期ないーぶネットを考える	10
● 大阪府立中央図書館の音訳図書ネット配信事業	11
● 本間一夫氏 ご逝去	12
● 河合さんを偲んで	14
● 啓発ビデオの製作進む	15
● 全視情協青森大会	15

ごあいさつ

理事長 岩井和彦

本年、当法人と関係の深い日本盲人社会福祉施設協議会(日盲社協)は50周年を迎えられます。また、当法人加盟の福岡点字図書館、ロゴス点字図書館も創立50周年を迎えられ、誠に喜ばしいことでもあります。日盲社協の創立者である岩橋武夫が最初に着手したのは、点字出版事業でありました。視覚障害者の社会参加に「情報」は不可欠であるとの判断があったからでしょう。今、「情報」がますます大きな意味を持つ時代になりました。

来年30周年を迎える当法人の歩みは、まさしく人と人とのつながりによるネットワーク化と、オンラインによるネットワークを構築することを通じて視覚障害者の社会参加を支援するものであったといえます。1994年の20周年にまとめられた『ネットワーク構築の道のり～全国点字図書館協議会20年の歩み』の発刊にあたって当時会長の川越さんは「20年の歩みは、一言で言えば、ネットワークの促進、であったと言える」と総括されました。点字図書館が、わが国の視覚障害者はもちろん、障害者全般の福祉の推進に先達としての役割を果たして来たことは誇るべき事実でしょう。同記念誌に原稿を寄せた当時の日盲社協理事長松井新二郎氏は、「遅きことは恐れないがとどまることのみを恐れる」と励ましてくださいました。その後の10年は、福祉環境の変化と情報環境の変化の中で、ネットワーク化の努力が実を結び、「ないーぶネット」という果実を手に入れることができました。あらためて、30年にわたり努力いただいた先輩諸氏に心より感謝申し上げます。

さて今や、故・松井先生が言われた「遅きことは恐れないが」を許さないほどに当会の周辺事情は変化しています。理事会は、新しい理事を迎え荒波に乗り出しました。NPO法人としての新たな展開が図れるかどうかは新執行部メンバーを支えていただく皆様のお力によると考えております。「組織強化とないーぶネットの安定的運営、そして、2006年度からのデジター1本化に向けての体制作り」を掲げての船出ではありますが、皆様には、汗と知恵のご提供をお願いすることで夢のある組織にしようと、理事一同決意を新たにしております。

当法人は、平成14年度から啓発委員会を設置し、これまでの会員施設の自助組織的性格から社会的存在感を持ち得る組織への飛躍を求めて1歩を踏み出しました。理事メンバーにも他団体から、さらには企業や学識経験者の招聘も考えられるでしょう。

「ないーぶネット」は、平成11年度厚生省(現・厚生労働省)補正予算によりインターネット化された結果、地域格差が解消され、いつでもどこでも利用できる本格的な全国ネットワークとして、3,000名の皆様に利用いただくまでに成長することができました。しかし、ネットワークの安定的運営のためには財源確保が必要であり、今年度は特別金の徴収を行わざるを得ませんでした。さらに、視覚障害利用者からは、音訳資料

のネット配信も含めた‘夢のシステム’が求められています。すでに、利用者とともに、次期システムの検討が始まっています。

本年2月、厚生労働省は「身体障害者更生援護施設の設備及び運営に関する基準」を改正する省令案に関する意見の募集を行いました。情報提供施設の業務が多岐にわたっている今、時代の変化に合わせた議論と共通理解が必要です。青森大会までに議論の盛り上げを期待しています。

4月、これまでの「措置」から「契約」へという新しい考え方の下で支援費制度も始まりました。これからは利用者の権利、人権という視点からの新しい取り組みも必要です。

昨年10月には、「アジア太平洋障害者の10年」最終年記念として開催されたブラインド・サミットで他団体とともに「著作権と情報アクセスに関する声明」を行いました。また、デイジー再生機の日常生活用具化、第4種郵便無料の明文化などの要望実現についても、日本盲人会連合等との協同行動で進めていきたいと考えます。

NPO法人として、フットワークの軽い理事会・執行部として活動してまいりますので、ご協力をよろしくお願いいたします。

臨時総会 報告

去る6月13日(金)、東京の日本点字図書館を会場に、平成15年度第1回臨時総会が開催されました。委任状提出を含め84施設が出席し、以下のとおり審議し、了承されました。

第1号議案：理事の交代について

(新任)石渡信孝氏(神奈川県ライトセンター 所長)

(辞任)小林久寿氏(山梨ライトハウス盲人福祉センター 所長)

竹島信也氏(三重県点字図書館 館長)

第2号議案：平成14年度事業報告、補正予算ならびに決算報告

藤野事務局長から平成14年度事業報告ならびに決算報告がなされ、続いて監事の原文男氏(徳島県立盲人福祉センター所長)から、5月23日、大阪の全視情協事務局で会計監査を行い、適正な処理がなされていたとの会計監査報告が行われた。

第3号議案：平成15年度事業、補正予算について

平成15年度事業計画・予算については、昨年10月に広島市で開催された平成14年度全視情協総会で決定しているが、追加・変更された件につき確認し、補正予算として計上した。

特に主要目標として掲げた「2006年度からの録音図書デジタル化」については、元・録音委員会委員長の姉崎久志氏（神奈川県ライトセンター）からこれまでの経過説明が行われ、プレクストークの日常生活用具化（16年度実施）なども要望しながら、デジタル化のプログラムについて早急に具体化を図ることとした。

第4号議案：全視情協青森大会について

配布資料をもとに、金津理事（大会担当）ならびに大会事務局となる青森県視覚障害者情報センターから詳細な説明が行われた。

第5号議案：郵政公社等への要望について

決議（案）が提案され、総会決議として採択された。

第6号議案：その他

「ないーぶネット登録文書製作基準」が了承された。

臨時総会決議

6月13日の臨時総会において決議された事項は以下のとおりです。

また、6月24日、理事5名が厚生労働省、総務省、日本郵政公社に赴き、これらの実現に向けて要望書を手渡しました。

決 議

- デジタル録音図書再生機（読書機）を平成16年度に日常生活用具として指定することを要望する。
- 郵便法に点字郵便物及び盲人用録音郵便物の無料扱いを明文化するよう要望する。
- 内国郵便約款第38条（注）に規定された「点字用郵便」の表示を変更するよう要望する。

以上、決議する。

平成15年6月13日

特定非営利活動法人

全国視覚障害者情報提供施設協会

大任の中で学んだこと

川越利信

全国点字図書館協議会の時代からNPO法人としての全国視覚障害者情報提供施設協会に至る10年間、私は「会長」あるいは「理事長」という大任を仰せつかりました。

全視情協は、実際には藤野克己さんを中心に、特に氏のご尽力のおかげで今日までネットワーク・サービスを継続することができております。その周りに岩井和彦さんや事務局の正井和子さん、それに経験豊富な後藤市郎さん、お世話役の金津和栄さん、中央情報に強い田中徹二さんなどがおられ、みなさん各々が本当によくお働きくださり、私自身は楽をさせていただきました。また、会員や理事の皆様のご協力で、私なりに大任をまっとうさせていただきました。ここに改めて感謝申し上げます。

さはさりながら、第28回広島大会の全プログラムが終了し、閉会の挨拶を済ませた時、ふうっと気が遠去かるような、言い知れぬ安堵感を覚え、両肩から重い物が除かれたような錯覚を起こしたものです。

私は、10年間「何をしたか」あるいは「何ができたか」よりも、何を大切にしていたか、今、省察しています。どうだったのか。それは、一言で云うなら、「ネットワークの構築」を想い続けていた、と言えます。視覚障害者の情報環境をより整備し「目のかわり」を果し得る全国的なネットワークの構築が必要である、そのネットワークは、視覚障害者への情報サービスに関わるより多くの人々が共に構築の作業に携わることにより、

視覚障害者の得る利益はより大きくなる、と考えていました。特定の施設や大きいだけのいわゆるハコモノでは、サービスの質と持続性、安定性にいずれ支障をきたす、とも考えていました。常任理事会などで複数の選択肢から、採るべき案（道）を決する時、迷った時、つまり舵取りの意志決定の際、私のモノサシの底には常に「よりよきネットワーク構築」という、いわば信念というか持論が横たわっていました。

意志決定には常に光と陰がつきまとい、支持層と不満層とに分かれるものです。あの人この人の顔を浮かべ、置かれている身分・立場などを考えると、その世界が狭いほど、意志決定などという生臭い野蛮行為（と思われがちな事）はしたくないものです。それでも意志決定して行かなければならないのが大任を負う者の宿命です。意志決定に続いて、実行・実現化が求められます。不満層が陣をしく異次元でのいわば土俵を移してのイクサが待ち受けます。そこを戦い、超えて行く時、組織は本来の目的を成し得る力を発揮し、任務を果たせるのでしょうか。是非はともかくとして、それが現実の社会であり、活きた組織というものなのかも知れません。大任の中で学んだ一つです。

岩上義則さん、後藤健市さんに加えて、福祉界の経験しか無い者は絶対に識り得ない現実社会で魑魅魍魎（ちみもうりょう）相手に戦い抜いて来られた近藤豊彦さんも参加して来られました。豊かな「目のかわり」たりうるネットワーク構築を期待いたしております。

平成15年度事業について

〔主要目標〕

平成15～16年度の基本テーマ「組織の強化と『ないーぶネット』の安定的運営」に加えて、平成18年（2006年）度からの録音図書デジタル化にむけての体制を整えることを大きな柱とする。

〔年間行事日程〕

（1）総会

臨時総会

日時：平成15年6月13日（金）13:00～16:30

会場：日本点字図書館（東京）

通常総会

日時：平成15年10月15日（水）10:00～12:00

会場：ホテル青森（青森市）

（2）大会

「第29回全国視覚障害者情報提供施設大会」

期日：平成15年10月15日（水）～17日（金）

会場：ホテル青森（青森市）

「第30回全国視覚障害者情報提供施設大会」

期日：平成16年10月13日（水）～15日（金）

会場：西鉄グランドホテル（福岡市）

（3）講習会・研修会

ないーぶネット研修会

期日：平成15年7月10日（木）～11日（金）

会場：日本財団（東京）

目録研修会

期日：平成15年8月21日（木）～23日（土）

会場：早稲田大学メディアネットワークセンター（東京）

点字指導員研修会

期日：平成15年8月27日（水）～29日（金）

会場：大阪コロナホテル（大阪市）

音訳指導技術講習会（第7回音訳指導員資格認定講習会）

期日：平成15年11月11日（火）～13日（木）

会場：東京グリーンホテル水道橋（東京）

〔委員会ならびにプロジェクト活動〕

サービス委員会

1. 研修会プロジェクト
2. 目録入力プロジェクト
3. サポートプロジェクト（N-LINKサポート、ネットワークサポート）
4. 点字・録音雑誌一覧製作プロジェクト
5. 実態調査プロジェクト
6. ハンドブック改訂プロジェクト
7. 著作権マニュアル作成プロジェクト
8. 「ないーぶネット」次期システム検討プロジェクト

点訳委員会

1. 講習会プロジェクト
2. ないーぶネット点字データ審査プロジェクト
3. テキスト改訂プロジェクト
4. 「点訳のてびきQ & A集」製作プロジェクト

録音委員会

1. 音訳指導技術講習会プロジェクト
2. 音声デジタル化プロジェクト
3. 「処理事例集」製作プロジェクト

啓発委員会

1. 平成14年度に実施したアンケートの集約
2. 啓発用ビデオ製作
3. 点字通信教育システムの立ち上げ

各種研修会も順次開催

ないーぶネット研修会（7月10日（木）～11日（金）、東京）

134名が参加。重複製作の問題について再認識するとともに「必要な重複と避けられる重複」などの提言も行われました。また、スウェーデンやドイツなどの国際的動向についても紹介されました。

目録研修会（8月21日（木）～23日（土）、東京）

この研修会では、本来の図書館の機能、目録の役割や私たちが日々用いている検索プログラムの構成などを習得しました。早稲田大学メディアネットワークセンターという恵まれた環境の中で、内容的にも一般では受けられないような図書館学の専門分野を講師の渡部氏から受講できたことは、たいへん有意義でした。参加者34名。

点字指導員研修会（8月27日（水）～29日（金）、大阪）

点字指導員の有資格者を対象にしたフォローアップ講習会として開催され、92名が参加。新しく改訂された「ないーぶネット登録文書製作基準」についての講義が行われました。

運営基準改正についての講演会

本年2月、厚生労働省は「身体障害者更生援護施設の設備及び運営に関する基準」を改正する省令案について意見募集を行いました。本会としても「音訳指導員の配置」などを要望しましたが、このことに関して、去る6月13日の臨時総会終了後、講演会として厚生労働省社会参加推進室の田村補佐をお招きし、お話を伺うことができました。

以下はその概要です。

日 時：6月13日(金) 15:00～16:00

会 場：日本点字図書館

講 師：田村 一氏(厚生労働省 障害保健福祉部 企画課 社会参加推進室 室長補佐)

【講演要旨】

本年2月、厚生労働省は「身体障害者更生援護施設の設備及び運営に関する基準」を改正する省令案に関する意見の募集を行った。この改正は、4月からの支援費制度施行に伴うものであり、現行条文の整理であった。

視覚障害者情報提供施設に関して寄せられた意見についても検討したが、変更点はなく、当初案どおり施行された。

寄せられた意見は大きくわけて次の3点であり、それぞれについて以下のように考える。

音訳指導員の配置を明記してほしい(9件)

最低基準に職員の配置を位置づけると運営費に関わる面もあるので、現行枠組内で対応していただきたい(第82条第2項に「前項の他に必要あれば職員を配置できる」と記されている)。ただし、IT化の現状の中で、デイジー化やインターネット配信(ないーぶネット)に対応した実態、今後の展望などを見据えて、前向きに検討していきたい。

編集校正室の設置を明記してほしい

録音室に必要機材を加えて校正室にするなど、既存の設備を改善して対応することも可能と考える。各施設で弾力的に運用することは現段階の規程でも可能。

歩行訓練の実施が可能となるようにしてほしい

視覚障害者情報提供施設の役割は、情報を記録したものの製作・貸出、点訳者等の養成・派遣等であり、歩行訓練については他の施設(更生施設)が位置づけられている。実態として必要性があるということだと思うが、更生施設において実施することが効果的であると考えます。

これらについては、今後の運営実態・調査結果なども考慮して検討していきたいと思うが、「財源の確保」という問題を避けて通ることはできない。

地方分権の推進による財源移譲とともに、「何を優先していくか」を考えなくてはならない。つまり、現在の事業運営や事業内容と、それに対する助成の内容についてあらためて点検・検証した上で優先順位をつけるということである。

もちろん、障害者の日常生活、社会参加における社会環境の変化もふまえて前向きに検討したい。ただ、現在は、支援費制度施行関連の経費確保が第1となっている。この中で情報提供施設の運営費や日常生活用具の給付にかかる経費をどのように確保するかが問題である。

全体としては、障害者対策推進のベースは昨年末に策定された新しい障害者プランであり、それに沿って新たな事業展開をしていきたい。例えば、地域における生活支援システムをどのように考えるかという視点から、障害者の地域生活支援に関する検討会を立ち上げた。団体幹部、有識者、地方自治体等に参画していただいている。中期的な視点で取り組む必要がある。また、基礎構造改革に沿った新たな仕組み作り・骨格作りを考えていく好機でもある。当事者（地方公共団体と施設）が協力して研究・検討し、その成果を国民にアピールすることで、優先順位についても国民合意を得られ、的確な財源配分ができると思う。

このあとの質疑では、措置費（人件費）の据え置きの実態や歩行訓練の実施について、またIT支援サポートセンターについて意見交換がなされた。プレクストークの日常生活用具化については「長年の要望として受け止めている。来年度にむけての要求事項として、十分視野に入っており、現在調整中である。」とのコメントがあった。

福岡点字図書館 創立50周年おめでとうございます

7月27日(日)、福岡市のクローバープラザにおいて福岡点字図書館創立50周年記念式典が行われました。当日は620名余の出席者を迎え、本会からは岩井理事長が列席しました。式典のあと、NHKの小野文恵アナウンサーによる記念講演が行われました。

午後からは会場を博多都ホテルに移して祝賀会が行われました。職員のみならず利用者やボランティアによる実行委員会が中心になって企画されたもので、楽しいひとときを過ごしました。

また、26日から機器展も同時開催されました。

次期ないーぶネットを考える

サービス委員会

平成11年度厚生省補正予算事業としての「点字図書情報ネットワーク整備事業(ないーぶネット事業)」は、2001年(平成13年)の正式サービスインから、丸2年を経過しました。この数年間に、ネットワークに登録された目録数、利用者数、点字データ数は、いずれも好調な伸びをみせており、その成長曲線は、私たちの当初の予想を大きく上回るものでした。総合目録の検索や点字データのダウンロード、Web上から貸出希望の図書を取寄せることができる「オンラインリクエスト機能」といった、インターネット技術を利用した最新の機能も有効活用されており、この2年あまりの当事業の達成には、一定の評価に値するものがあるのではないかとひそかに自負しております。

しかし、こうした、事業の成功(好調、盛況)の裏側で、あるひとつの危機が忍び寄りつつあります。事業の根幹を支えるインフラであるところのネットワーク運用のための機器およびソフトウェアに早急な更新(システムの比較的大規模なリプレイス=Replace)が、求められているのです。これは事業の「成功」と表裏一体の関係にある、深刻な問題であります。

この2年あまりで、ネットワークの利用が拡大し、目録数、利用者数、登録コンテンツ数ともに、当初の予想を上回る増加を見せたことは、上で述べたとおりであります。サービスの盛況と引き換えに(正確には、まさにその「盛況」のゆえに)、ネットワークを支えるインフラ部分にかかる負荷は、現状の機器構成ではとても対応しきれないほど、巨大なものになりつつあります。ネットワークの利用が活発になればなるほど、インフラにかかる負荷は増大し、維持・管理にかかる各種のコストも、次第に大きなものになってゆくことが予想されます。また、もし仮に当初の予想を上回る利用がなかったとしても、ネットワーク関連の機器やソフトウェアには、経年劣化による機器の交換や、技術革新に伴うプログラム更新が常に求められるところであり、つまるところ、現在の点字図書情報ネットワークは、

「利用増加に伴う負荷の増大 + 経年劣化 + 技術革新への対応」
という3方向から、同時かつ早急に、機器およびソフトウェアの更新を迫られていることとなります。

6月24日に日本点字図書館で第1回検討会議を行いました。会議冒頭に岩井理事長から検討の目的について以下のように説明がありました。

「情報サービスの根幹をなす『ないーぶネット』の次期開発を今後どのように行なっていくべきか。次期システムの構想を練るにあたり、開発に関わる方々には、共通のビジョンを持ってもらうことが必要となるだろう。無論、開発担当者に限ったことでなく、全視情協としても、しっかりとしたビジョンを持つことが必須であると考え。(開発担当理事の)後藤理事を中心に、各委員会、プロジェクトとも連携しながら、全視情協として、組織の足場がためをしたい。また、最近の動きとして、日本盲人会連合が新たな

システムを立ち上げるようであるが、そうした後発の新システムとの差異も明確にしながら、次期ないーぶネット構想を打ち出していかなければならない。皆さんの協力のもと、目標に向かって進んでいきたい。」

当面は機器更新に充てる直接の予算もないことから、この問題への対処は、その必要性と緊急度の高さにもかかわらず極めて困難であるといわざるを得ませんが、これから始まる音声配信等も視野に入れ、夢のある次期システムの構築を目指していきたいと思えます。

詳細については全視情協青森大会の席上で報告、審議したいと考えています。

第1回次期ないーぶネット検討会議

日 時：6月24日(火) 11:00～15:00

場 所：日本点字図書館

出席者：

(全視情協関係) 岩井和彦、藤野克己、後藤健市、稲葉富子、村井晶人

(プロジェクトメンバー) 梅田ひろみ、川西幸治、塩沢浩司、小川俊樹、蕪木克行、
吉弘裕子、勢木一功(『ないーぶ』開発メンバー)

(サービス委員会関係) 小野俊己、工藤孝雄、川崎 弘

(日本点字図書館関係) 岩上義則、天野繁隆、伊藤宣真、吹越寿一

第2回次期ないーぶネット検討会議

日 時：8月12日(火) 13:00～17:00

場 所：日本点字図書館

出席者：(全視情協関係) 後藤健市、村井晶人

(プロジェクトメンバー) 川西幸治、塩沢浩司

(日本点字図書館関係) 吹越寿一

(サービス委員会関係) 小野俊己、川崎 弘

大阪府立中央図書館、音訳図書ネット配信事業開始

大阪府立中央図書館が4月30日から録音図書ネットワーク配信事業を開始しました。これは、「大阪府マルチメディア・モデル図書館展開事業」における福祉型Web図書館システム構築の一環として実証実験を行っているものです。

対象図書は、日本障害者リハビリテーション協会が平成11年度厚生省補正予算で製作した録音図書(デージー図書)であり、当法人がマスター保存館として社会福祉法人日本ライトハウスに寄託しているものです。

本間一夫氏 ご逝去

8月1日(金)、日本点字図書館の創設者であり現会長の本間一夫氏が逝去されました。氏は戦中戦後を通じて点訳図書館の製作普及に尽力され、わが国の点字図書館の歴史を切り開いてこられた方です。本年1月に井上靖文化賞を受賞されましたが、そのころから体調をくずされ、療養しておられました。

8月6日(水)、柏木教会において近親者による密葬が行われましたが、お別れ会は来る9月9日(火)午後1時から全社協・灘尾ホール(東京)において予定されています。

感謝と信頼の人 本間一夫

日本点字図書館館長

岩上義則

昔のラジオ番組に『光を掲げた人々』というのがあった。電話の発明者グラハム・ベルやアフリカの医療に尽したシュヴァイツァーなど、文化の発展に著しく貢献した人物をドラマ仕立てにして、その業績をたたえて紹介する番組だ。今、その番組を思うにつけ、日点の創設者本間一夫もまた、日本の視覚障害者に光を掲げた人と呼ぶにふさわしい人物ではないかという気がする。

本間一夫は、1928年(昭和3年)に13歳で点字と出会うのだが、その喜びが特別大きかっただけに、点字本があまりに少なかった失望との落差も際立ったようだ。その頃は、各地に盲学校ができ始めて間もない時期であり、日本の点字が翻案されてからさえ、たかだか38年、教科書とて、まともなものがなかった時代であろう。学習書にしても小説にしても皆無に近かったことが容易に想像できる。それだけではない。むろん録音機があるわけもなく、視覚障害者の情報をかろうじて支えるものとしては、放送が始まったばかりのNHKラジオくらいだろうし、それとても誰もが聴ける時代ではなかったはず。つまり、今から70年以上前は視覚障害者は情報の面でも暗黒の中にいたことになる。それだけに、本間が日本盲人図書館(日点の前身)を創設したことは日本の視覚障害者に光を掲げる大事業だったと言える。さらに、点字図書館を増やすために行った点訳運動の提唱は、戦中・戦後の激動期にも耐えて善意の輪を拡げたものであり、今日の視覚障害者への情報提供の根幹をあらしめるものとしてその功績は絶大で計り知れない。本間が呼びかけたボランティア活動は、昭和33年に日点が始めた録音図書製作にも生かされて、聴く読書と読む読書を強固に支える2本柱となった。

用具事業に手を染めたのも英断だ。視覚障害者が生活上のハンディを補うには道具の助けが必須である。本間は、昭和39年ニューヨークで開かれた世界盲人福祉会議に出席した足で欧米を巡り、多数の用具を買い集めてきた。それらを展示して日本の視覚障害者に見せたところ、欧米の先進ぶりを強く印象付けられると同時に、是非日本でも用具

の開発をと望む切実な声が起こった。それに直ちに応えて昭和41年、日点で用具事業を始めたのであった。

このように、次々と新機軸を打ち出す本間一夫だったが、経営の仕方においては、辣腕をふるうといった切れ味の良さを見せるものではなかった。本間が採った経営の手法は、ひたすら感謝と善意への信頼だったように思うし、この二枚看板こそが本間が日点の今日を築くのに成功した真髓だったのである。そして、それこそが大不況に耐え、時代の荒波にも普遍的かつ最強の支柱であることを教えたのである。が、この「感謝」と「信頼」は、言うは易く行うに難いものであることもまた強く知らしめているのである。

ところで、本間は晩年にも夢を持ち続けていた。見果てぬ夢の一端を『日点フォーラム』2003年春号からご紹介しておく。

「日本の盲人教育・福祉等の文化の水準は今欧米のそれに迫ろうとしているのですが、それは明治以後盲人の先駆者の方々が大変な努力を重ねてこられた結果にほかならないのです。そうだとすれば、その方々の輝かしい業績を展示する記念館(室)を設けてもよいのではないかということです。(中略)私個人が、著名な盲人の講演・放送等のお声を集めてカセットテープで保管しております。先年、名古屋盲人情報文化センターから出された『道ひとすじ 昭和を生きた盲人たち』のテープ版にも100人中88人までを提供しております。この両方の資料から選び出し、そこに写真などを添えれば現在でもある程度の形式は整うと思うのです。むろんこの企画は場所をどうするか、何人まで選ぶか、資料はどの範囲にするか等々問題は多く、スタートさせるためにはしかるべき方々で委員会を作るところから始めなければならないでしょう。皆様も、これは本間個人の病院のベッドでの夢とも言える 切なる願い としてお読みいただきたいのです。」

最後に、本間が座右の銘としていた詩をご紹介して私の拙文を終わることにしたい。

1人の悩みを癒し得ば
1人の憂いを去り得なば
疲れし鳥の1羽をば
助けてその巣に返し得ば
我生活は無駄ならず

訃 報

高知点字図書館 館長の清遠信男氏が、8月18日(月)、逝去されました。
謹んでお悔やみ申し上げます。

河合さんを偲んで

本会加盟団体「ひなぎく」の理事長であり、元・録音委員会委員長でもあった河合和美氏が、6月24日(火)午前5時26分、逝去されました。突然の訃報に驚かれた方も多かったと思います。

「朗読」から「音訳」へ、時代の一步先を行く河合さんの在りし日を偲びながら、録音委員会で親交のあったJBS日本福祉放送の恵美三紀子さんに追悼の文をいただきました。

河合さんの遺したもの

元・録音委員会委員

恵美三紀子

河合さん急逝の知らせはまさに青天の霹靂でした。脱力感に襲われたのは私一人ではなかったでしょう。職員・ボランティアを問わず音訳に携わるものが等しく感じたところです。灯台の明かりが消えてしまった、そんな心細さを感じます。

それまでの「朗読」に代わって「音訳」という言葉が使われるようになって約20年、以来河合さんは常に音訳とともにありました。それは利用者にとっては「与えられる読書」から「主体的に読む読書」への転換でした。ボランティアは「目の代わりとしての存在」ということで、一時は抵抗がありましたが、主旨が浸透するにつれて、あたりまえのこととして受け入れられるようになってきています。

河合さんの大きな功績は、音声化について体系化したことです。これによって「感覚的な指導」から「理論的な指導」への道が開かれました。

まず、それまでの用語を整理して「誰が聞いても同じように理解できる用語」にしました。「ピッチ」「ピーク」「スピード」というわかりやすい言葉で指導できるようになり、急速に読みのばらつきが少なくなり、読みのレベルも上がりました。

次に、音(声)の高低を重視したことです。言うまでもなく録音図書は聞く図書です。耳からの情報は、音によって伝わり方が違ってしまいます。適切な音で読むことによって、墨字よりも理解しやすくなるということすらあります。音訳が目指す「誰もが抵抗感なく自然に聞き取れる読み」について、日常会話の音の使い方に注目し、「話すように読む」ということを「文節をはっきりさせる読み方」と説明、「ニュースを伝えるアナウンサーの読み」と、身近な例を示すことで理解しやすくなりました。これは、指導を「どう読むか」から、「他人の読みを聞くこと」「他人にどう聞こえているか」に変えることで、そのためにはまず「聞く耳」を鍛えることが大切と強調しました。

こうして書いてくると、今私たちが音訳で使っている言葉のすべてであることに気づきます。ボランティア養成で一番大事なことは「誰でも読める」ことを前提に「短期間に、一定のレベルに育てる」ことです。河合理論によってこれが楽にできるようになりました。

河合委員長時代の録音委員会は正規の委員会のほかに深夜に及ぶ2次委員会(?)があ

りました。音訳創世期の頃は用語について、指導法について、侃侃諤諤やりあったものです。このなかから『活動するあなたへ』が生まれ、『音訳マニュアル』へと育っていきましました。もしかしたら2次委員会のほうが成果があったかもしれません。

河合さんは大のコーヒー党でした。そして愛煙家でもありました。議論が煮詰まってくると「ちょっと」といって一服し、コーヒーで頭を休めていました。今でも、その時のちょっとはにかんだような笑顔が目に浮かんできます。

これからも「利用者主体の録音図書」を作り続けるために、河合さんの遺したものを伝え広げていくことが私達、音訳に携わるものの使命だと思っています。

啓発ビデオの製作進む

啓発委員会の企画で、一般向けの啓発ビデオ（仮題・「はじめての点字」）の製作が進んでいます。

「てんじい」という名前のCGキャラクターが登場し、街中で見かけた点字について、その歴史などにも触れて解説し、実際に点字器を使って名前を書いてみるという内容。いろいろな点字器の紹介もあり、いくつかの視覚障害者情報提供施設（点字図書館）についても口ケ収録されます。

小・中学校の総合的学習の時間などでの教材としても活用できます。

今秋には完成予定で、全視情協青森大会での上映も予定しています。他の書籍同様、(株)大活字にて販売しますのでお楽しみに(価格未定)。

全視情協青森大会開催せまる

来る10月15日(水)~17日(金)、ホテル青森を会場に第29回全国視覚障害者情報提供施設大会(平成15年度全視情協青森大会)が開催されます。

「ないーぶネット」は、平成11年度厚生省(現・厚生労働省)補正予算によりインターネット化され、本格的な全国ネットワークに成長しましたが、今や音声資料のネットワーク配信なども含めた次期システムを検討する段階になりました。

また、運営基準(身体障害者更生援護施設の設備及び運営に関する基準)の改正についても時代の変化に合わせた議論と共通理解が必要です。

本大会では、こうした背景をふまえて、視覚障害者への情報提供事業のあり方を深めていきたいと思ひます。プログラムは次ページに記載のとおりです。

第29回全国視覚障害者情報提供施設大会(青森大会)日程

期 間：平成15年10月15日(水)～17日(金)

会 場：ホテル青森(〒030-0812 青森市堤町1-1-23 TEL 017-775-4141)

日 時	会 議	内 容	会 場	担 当
10月14日(火) 15:00～18:00	理事会	大会準備	はまなすの間 (B)	理事会
10月15日(水) 10:00～12:00	施設長会議	平成15年度通常総会	孔雀の間 (A)	理事会
12:30～13:30	受付・昼食		善知鳥の間	主管館
13:30～14:30	式 典	第29回全国視覚障害者 情報提供施設大会式典 (感謝状、大会決議ほか)	孔雀の間 (C)	主管館 理事会
14:30～15:30	全体会1	講演：厚生労働省	孔雀の間 (C)	主管館 理事会
15:40～17:00	オリエンテーション	理事長方針説明、日程説明	孔雀の間 (C)	主管館 理事会
17:00～18:00	チェックイン・休憩			
18:00～20:00	交流会		孔雀の間 (A)	主管館
10月16日(木)	分科会1	音声デジタル化の推進	あすなろの間	録音委員会
9:00～12:00	分科会2	著作権実務研修	はまなすの間	サービス委員会
	分科会3	これからの情報提供施設の あり方	善知鳥の間	理事会
12:00～13:00	昼食・休憩		孔雀の間 (A)	
13:00～15:50	全体会2	ネットワーク・サービスの動向	孔雀の間 (C)	サービス委員会
16:00～17:30	全体会3	地域の中の視覚障害者情報 提供施設	孔雀の間 (C)	啓発委員会
17:30～19:00	夕 食		あすなろの間	
19:00～21:00	フリートーキング(自由参加)		はまなすの間	主管館
10月17日(金) 9:00～11:30	全体会4	「ないーぶ」フォーラム (各施設の取り組み・意見発表 委員会報告)	孔雀の間 (C)	理事会
11:30～12:00	閉会式		孔雀の間 (C)	理事会

機器展示会

日時：10月15日(水)13:00～16日(木)18:00

場所：孔雀の間(B)